清末民初湖南における「私訪」故事説唱の流通

岩田和子

はじめに

清末民初は、中國の歴史や文化において重要な轉換期とされる。特に清代後期、中國國内は戰亂が絶えず、アヘン戰爭、アロー戰爭、太平天國の亂と、それに呼應した捻軍の蜂起など、道光（一八二一－一八五〇）、咸豐（一八五一－一八六一）、同治（一八六二－一八七四）年間と續く内憂外患を體驗する。のち、太平天國の亂、捻軍の鎮壓で活躍した、安徽省出身の李鴻章や、湖南省出身の曾國藩が中心となって政治を動かし、洋務運動を推進する。

この頃、江南諸地域、東南海沿岸部および北方地域を中心に、説唱文藝活動は廣がりをみせる。一方、内陸部の湖南省においてもそれは盛んに行われた。現在、説唱文藝のうち、北方の鼓詞、江南の彈詞、寶卷、廣東の木魚書、福建の潮州歌などに對する研究は多く報告されているが、湖南説唱本について言えば、目錄が二種發表されるのみで、[1] 主だった研究は未だ爲されていない。[2]

湖南説唱本は、中國大陸、臺灣、日本の各圖書館に所藏があり、それぞれ民間故事や小説、戯曲に取材する『孟姜女』、『珍珠塔』、『祝英臺』などの傳統演目のほか、新たに創作された湖南に所縁の深い故事が數多く現存する。中でも興味深いのが、本論で取り上げる『彭大人私訪蘇州』、『彭大人私訪蓮花廳』、『陶大人私訪江南』、『吳大人私訪漢陽』、『馬金龍私訪華容』など、「私訪」を書名に採る故事羣である。「私訪」とは、私行、微行などと言い、地方清官が變裝をして民情調査に出かける行爲である。古くは元雜劇「陳州糶米」や明成化説唱詞話「陳州糶米傳」における包拯の「私訪」から、清代の『彭公案』、『施公案』、『劉公案』など公案小説に至るまで、公案物の常套として存在する。[3] また、現在も康熙帝や乾隆帝の諸國漫遊などの長編テレビドラマが放送されるように、普遍的なモチーフとして脈々と民間に根付くものである。

その「私訪」故事が、清末民初の湖南において陸續と創作され、永州の文順堂、湘潭の楊文星堂や黄三元堂、長沙、洪江、武岡など、湖南省のほぼ全域で大量に出版された。これは、單獨で起きた特殊な文化現象であったと考えられる。本論では、この現象が引き起こされる契機と、説唱本の流通における地方文化モデル成立の背景について、當時の社會事情や、出版活動からの考察を試みる。先ず、全國各地に

現存する湖南の「私訪」故事説唱本の各種版本の収集、整理を通し、それらの特徴を把握する。次に故事内容に対する分析を行い、それぞれの故事に共通する特徴と、故事の形成および流通を支える歴史的、文化的背景について検證する。そのうえで、湖南「私訪」故事説唱の、清末民初における文學史的位置付けを提示したい。

一、「私訪」故事版本の種類と特徴

(1) 版本の種類

湖南における「私訪」故事のうち、吳大人、陶大人、彭大人に關する物語は、現存する版本の種類が多く、廣く流行した代表的なものだと言える。各地における所藏狀況を以下に擧げる。(4)

吳大人

	書名(卷首題)	封面	刊記	所藏箇所
①	吳大善私訪漢陽	三人頭全部／新刻吳大善訪武昌／七十冊／中湘九總黃三元堂發客	中湘：黃三元堂刻本	湖南圖、國圖、復旦、上圖×2部、大木
②	新刻九人頭吳大人私訪	吳大人私訪九人頭／新刻漢陽府 獄神殿明冤 捉拿張大紅／二百廿冊／星沙小西門外上河街□□歌書發客 吳公案 下卷／後本 長發救親 得妻財 楊春龍拜干父昇官／□□歌書發客	星沙刻本	湖南圖、復旦、上圖×3部、首都圖、大木
③	新刻九人頭吳大人私訪（存一卷）	吳大人私訪九人頭／新刻 漢陽府 獄神殿明冤 捉拿張大紅／百七十冊／星沙小西門外上河街左三元堂歌書發客	星沙：左三元堂刻本	國圖
④	吳大人私訪九人頭	吳大人私訪九人頭下卷 上海椿蔭書莊發行／總督監牢訪案 大紅案發被捕 長發鳴冤出首 惡棍難逃伏法	上海：椿蔭書莊石印本	傅斯年、北大圖
⑤	校正吳大人私訪九人頭奇案全傳	吳大人私訪九人頭卷上 上海協成書局印行／春龍落第投江 妬姦刀二命 圖財推人下井 買頭反成鐵案	上海：協成書局石印本	傅斯年

陶大人

	書名(卷首題)	封面	刊記	所藏箇所
⑥	新刻清官傳陶大人私訪南京道情眞本	清官傳全部／新抄 陶大人私訪南京省道情眞本／二百冊／益陽縣頭堡文元堂書坊梓	益陽：文元堂刻本	湖南圖
⑦	新刻私訪江南	新刻陶大人私訪南京／百二十折／清官傳全部／武岡州正街大林堂福記	武岡：大林堂福記刻本	上圖
⑧	新刻私訪江南	清官傳全部／新刻 陶大人私訪南京道情眞本／六百冊／洪江□□堂書坊梓	洪江刻本	上圖
⑨	私訪江南	陶大人私訪江南／新抄 眞本私訪曹百萬 捉拿尤子金／□□冊／□□堂揀抄眞本發客 劉龍李豹 搜曹府／眞傳／後本 吳官保頂職 蔡秀英受封		湖南圖、復旦、上圖、早大演博
⑩	私訪江南（存卷四）	劉龍李豹 搜曹府／眞傳／後本 吳官保頂職 蔡秀英受封／八十冊／中湘九摠 黃三元堂藏板	湘潭：黃三元堂刻本	國圖

彭大人

	書名（卷首題）	封面	刊記	所藏箇所
⑪	私訪蘇州	彭大人私訪蘇州／新刻　桂英陰魂申冤　捉拿向氏兄弟／八十五冊／中湘楊文星堂歌書發客	中湘：楊文星堂刻本	早大演博、早大中央、國圖、首都圖×2部、復旦、上圖×3部、湖南圖、大木
⑫	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京／新板　湖南人南京受害　劉大人洩恨報仇／八十冊／光緒丙午年文元堂書坊梓	清光緒三二年（一九〇六）文元堂刻本	湖南圖
⑬	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京／新到　湖南人南京受害　劉大人洩恨報仇／六十冊		湖南圖
⑭	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京／新刻　湖南人南京受害　劉大人洩恨報仇／五十冊		國圖
⑮	彭大人私訪蓮花廳		寶慶：文元堂刻本	湖南圖
⑯	私訪蓮花廳全部	彭大人私訪蓮花廳／新鈔　江西省　寶文秀冤魂伸冤　捉拿石匠朱大龍／八十六冊／長沙小西門外上首湘鄉碼頭□□堂發客	長沙刻本	湖南圖、首都圖×2部、復旦、上圖×3部
⑰	彭大人私訪蓮花廳全部	民國丙寅年新刻／私訪連花廳／五金山冤魂顯應　奉聖旨二次出京／一千折／永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州：民國十五年（一九二六）文順慶記刻本	上圖
⑱	彭大人私訪連花廳全部		永州：西鄉田洞餘家刻本	國圖
⑲	私訪蓮花廳全部	彭大人私訪江西／新刻　蓮花廳　廳官進京面聖　皇娘保本復訪／八十六冊／中湘十摠正街同華堂歌書戲文發客	湘潭：同華堂刻本	國圖
⑳	私訪廣東	私訪廣東全部／新抄眞本彭大人私訪萬花樓捉拿馬三洪／□十六冊／楊文星堂發兌	左三元堂刻本	湖南圖、早大演博、復旦、上圖×3部、首都圖×3部
㉑	私訪廣東	私訪廣東全部／新刻眞本彭大人私訪萬花樓捉拿馬三洪／貳百八十／洪江豐泰新堂揀抄眞本發客	洪江：豐泰新堂刻本	上圖
㉒	彭大人私訪廣東省	民國乙丑年新刻／私訪廣東／折毀萬花樓　捉拿馬三洪／一千折／永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州：民國十四年（一九二五）文順慶記刻本	上圖
㉓	私訪九龍山	私訪九龍山／新抄　姜大岸指路　師爺算八卦／七拾冊／星沙黃三元堂歌書發售	星沙：黃三元堂刻本	湖南圖、首都圖、早大演博
㉔	私訪九龍山	彭大人私訪九龍山／新刻　姜大岸指路　師爺算八卦／七十冊／益陽頭堡文元堂歌書發販	益陽：文元堂刻本	湖南圖
㉕	私訪九龍山	私訪九龍山／新抄　姜大岸指路　師爺算八卦／□拾冊／中湘楊文星堂刊刻	中湘：楊文星堂刻本	首都圖、復旦、上圖×3部
㉖	私訪湖北漢陽全部	彭大人私訪湖北／新刻　漢陽府　嚴玉春買糖封提臺　曰英拜干父做夫人／□□冊／中湘楊文星堂戲文發客	中湘：楊文星堂刻本	湖南圖、首都圖×2部、復旦、上圖×2部
㉗	私訪湖北漢陽（損壞）		黃三元堂刻本	湖南圖

その他にも「私訪」を書名に採るものに、湖南省華容縣の知縣馬金龍の『私訪華容』（長沙・左三元堂刻本、湘潭・同華堂刻本、國圖所藏。蕭福祥刻本、湖南圖所藏）、盧知縣の『盧知縣私訪武陵』（常德・明經堂刻本、湖南圖所藏[5]）、『私訪長沙』（長沙・黄又森刻本[6]）、また、これら地方清官以外に、乾隆帝の『私訪遊南京』（洪江刻本、上圖所藏）、嘉慶帝の『新刻私訪桂花城』（永州・王文順堂刻本、上圖所藏。湘潭・黄三元堂刻本、國圖、上圖所藏）、など皇帝の私訪物も出版される。[7]

(2) 版本の特徴

次に、表で擧げた各種版本の特徴をみてみたい。先ず、版式について述べる。説唱本の大きさは、それぞれ凡そ縱十五～十七センチ×横十センチ前後、匡郭は十三～十五×八センチ前後の小型本である。全て四周單邊で、毎半葉は十行二十一字を基本とする。一編は殆どが二十～三十葉程度、中には六十葉程の故事もある。

また「私訪」故事に限らず、湖南説唱本の特徴は、その封面と卷末にあると思われる。封面には、封面題、表題、刊行地、刊行年、印刷數など、出版に關する様々な情報が記載されているため、一目でその故事についての凡そを理解することが出來る。また、卷末にはほぼ必ず「看書君子、敬惜字紙（書を看る君子、敬んで字紙を惜しめ）」や「敬惜字紙」等の文句が添えられる。

封面表記を手掛かりに判斷すると、刊行地には、長沙、湘潭、寶慶（邵陽）、永州、洪江、益陽、武岡の地名が擧がり、湖南省ほぼ全域で出版活動が盛んだった事が窺える。例えば、⑧や⑯などのように地名のみを記して書肆名が削除されるもの、⑳や㉖のように冊數が削られるもの、中には封面の情報と本文の卷首題下に刻される書肆名が異なるものなどがあるが、これらは何れかの書肆で使用された版木が、湖南省内の各書肆に渡り、場所を變えて繰り返し印刷、出版されるうちに生まれた現象だと思われ、この種の説唱本が大量に出回っていた事を示す例と言えるだろう。また、封面題の他に表題が付されることも特徴のひとつである。例えば⑪の「桂英陰魂申冤　捉拿向氏兄弟」や、⑫の「湖南人南京受害　劉大人洩恨報仇」などは、章回小説の回目に倣っており、故事内容を簡潔に傳える役割を果たす。まるで章回小説のうち、「私訪」にまつわる回を切り取り、單獨で出版したかのような體裁を取る。

(3) 説唱形式

また、これらの故事は、本文の説唱形式から大きく①、⑥～㉗と、②～⑤に分けることが出來る。

先ず、①『吳大善私訪漢陽』と、⑥～⑩の陶大人、⑪～㉗の彭大人の故事は、張光繼氏の湖南説唱本に對する分類[8]によると「乙類」に屬す。「乙類」とは、

> 冒頭の四句或いは八句は七言詩に似ているが、詩句の形式ははっきりしない。その後、韻文、散文が不規則に續く。韻文は全て七言句で、隔句韻、一韻到底、多くが平聲韻で押韻する。韻文の前は「～不講～單講～」や「～不唱～單表～」などの用語を以て正文に入る。…散文の語りは、「説話」、「却説」などの語から始まる。[9]

また、②～⑤の『新刻九人頭吳大人私訪』は、張氏の分類によると「甲類」に屬す。「甲類」とは、

全篇七字句で、冒頭の四句は七言詩に似ており、第一、二、四句で押韻するが、詩句の形式ははっきりしない。その後に七字の韻文が續き、隔句韻で、一韻到底、多くが平聲韻で押韻する。よく「～不講～單講～」という用語を使う。たまに七字句の間に十字句が插入されることがあり、全篇の末尾に七言四句の贊語が加わることもある。[10]

押韻について張氏は一韻到底とするが、實際のところその規則も嚴密ではない。ただし大きく以上のような形式を以て本文は構成される。[11]

二、湖南「私訪」故事內容の特徵

(1) 湖南の有名人による私訪

湖南「私訪」故事は、まず冒頭で時代背景や主人公である各大人の出自や功績などを紹介し、その働きにより皇帝から各地の巡閲を命じられ、「上皇劍」卽ち公案劇や公案小說でお馴染である切り捨て御免の尙方寶劍と、刑を先に執行した後に奏上する「先斬後奏」の特權、および「三千の人馬」を賜り[12]民情調査へ出向く、という展開がひとつのパターンとなっている。主人公のうち代表的な三人を以下に擧げる。

先ず吳大人は說唱本で「吳達善」或いは「吳大善」と記されるが、淸の吳達善（？-一七七一）のことである。『吳大善私訪漢陽』（①）では、乾隆帝が「湖廣缺少一員制臺，朕差那一個官兒去做（湖廣總督に缺員が出たが、どの官吏を遣わそうか）」と尋ねたところ、「陝西長安府長安縣端履門人，姓吳名大善（陝西省長安府長安縣の端履門の人で、姓は吳、名は大善と申す者がおります）」と、吳大善の名が擧がる。本來吳達善は、長安の人ではなく、滿州族正紅旗人であるが、もともと陝西駐防將軍の任にもあったので、故事の設定は必ずしも完全な虛構ではない。また、乾隆二十九年（一七六四）に湖廣總督となり、湖北巡撫を兼任し、同三十三年（一七六八）に、再び湖廣總督（荊州將軍を兼任）を務め、三十五年（一七七〇）には湖南巡撫となった、湖南・湖北と緣のある人物である。[13]

次に陶大人こと陶澍（一七七九-一八三九）は、湖南省安化縣出身で、道光元年（一八二一）に福建按察使から安徽布政使と轉任し、同三年（一八二三）には安徽巡撫を授かり、のち同十年（一八三〇）、兩江總督となる。[14] 故事における經歷も實際とほぼ同じで、『新刻私訪江南』（⑦、⑧）では「頭次挑在安徽省（⑨は「挑在」を「出任」に作る），八撫巡按管萬民（⑨は「八府巡按管黎民」に作る），安徽爲官多淸正，回朝參見聖明君（初めは安徽省で任に就き、八府撫按として民衆を巡視、安徽の官吏として淸廉潔白であったので、朝廷に戻り皇帝に謁見することになった）」そして、兩江總督の要職に拔擢される。さて、江南にやって來た陶大人であったが、「白…久聞江南黎民刁蠻，江洋大盜甚廣，爲甚麼一月有零，無人伸冤告狀（せりふ…江南は民衆が粗暴で、海賊も橫行していると聞いていたが、どうして一カ月餘り過ぎても、誰も訴訟を起こさないのか）」と訝しみ、「…我不免束衣小帽打班庶民（⑨は「束」を「靑」、「班」を「办」に作る），私訪江南一會（庶民の姿に身をやつし江南の民情調査をしよう）」と述べて出かける。

また、彭大人こと彭玉麟（一八一六・一八九〇）は、湖南省衡陽縣の人で、咸豐三年（一八五三）より、曾國藩に從い、湘軍水師を率いて太平天國と戰った指揮官である。長江流域を轉戰して太平天國陷落に貢獻し、亂平定後は同治十一年（一八七二）から死ぬ前年の光緒十五年（一八八九）まで長江水師として長江沿いの各省を巡閲した。[15]

特に彭大人「私訪」故事の導入部分では、必ず彭玉麟の太平天國における活躍が語られる。以下に、その一例として『彭大人私訪蓮花廳全部』⑰を擧げる。

…此書不講別一個，單說清朝彭玉林，家住湖南衡州府，清泉縣內有家門…拜門拜在曾國藩，三江總督元帥身，曾帥賜他一支令，領辦軍務打南京，同治三年破南京，太平天國化灰塵

…この本に書いてあるのは他でもない、さては清朝の彭玉林（麟）、住まいは湖南衡州府、清泉縣（衡陽縣の誤）に一族あり…曾國藩の軍門に入り、その三江總督元帥である、曾元帥の命を賜り、軍務を束ねて南京を攻擊、同治三年に南京を擊破し、太平天國は灰塵と歸す

そして同治皇帝から「十八省內把兵巡」十八省すなわち中國全土を隈なく巡閲するよう命じられると、彭大人は船に乘って目的地に到り、船上で「辦做看相算命人，頭戴一頂青布帽，藍布長衫穿在身，手中拿把三弦子，胸前吊本百中經（人相見の易者に變裝し、頭には黑い布帽をかぶり、藍染の長衣を身にまとい、手には三弦を持ち、胸の前に『百中經』の易書をさげる）」と變裝し、その土地の實狀を見に出かけるのがお決まりの展開である。

このように、陶澍や彭玉麟は、それぞれ清代中後期に全國的な活躍をした湖南の出身者、言わば地元の英雄であった。彼らは、湖南を起點にして各地へ赴き樣々な事件を解決する。一方、吳大人は、他所の土地から湖南・湖北地域へやって來て活躍する。その他の湖南「私訪」故事のうち、彼ら以外の主人公、例えば湖南省華容縣の馬金龍知縣や、湖南省武陵縣を私訪する盧知縣、湖南巡撫の趙陞喬など、彼らについての詳細はいずれも不明だが、何れにせよそれぞれ湖南省を據點に地域の治安維持に務める人物として描かれた。

(2) 湖南人のための私訪

また、各大人は「私訪」先でしばしば湖南人と出會い、彼らを助ける。『彭大人私訪南京』⑫は、南京での不當な迫害から彭大人が湖南人を救濟する樣を描くが、まず物語は「…七代咸豐登龍位，廣東反了姓洪人，名子叫做洪秀全，只有賊子多利害，鬧得江山不太平，他今坐了南京省（…七代に咸豐帝が卽位すると、廣東で反亂を起こしたのは洪という人物、彼の名は洪秀全、この反逆者は只者では無い、天下を騷がせ太平を亂し、現在南京省を占據する）」、「咸豐老王崩了駕，同治新主把基登…賢臣出在湖南省，左郭曾彭誰不聞，幾家清官都亡了，單講清官彭大人（咸豐帝が崩御し、新たに同治帝の御世を迎えた…賢臣が湖南省から出現し、左（宗棠）、郭（嵩燾）、曾（國藩）、彭（玉麟）を知らぬ者はいない、幾人かの清廉官吏は亡くなってしまった、さてお話するのは彭大人のこと）」と、天下太平の立役者である湖南省出身の湘軍の指揮官、左宗棠、郭嵩燾、曾國藩、彭玉麟を稱えて始まる。

詳しい物語の內容は以下の通りである。主人公の彭大人と湖南人に

恨みを抱く、安徽出身の兩江總督李大人が、南京における湖南人の居住、湖南出身の役人、湖南人による商賣を盡く禁止し、「湖南人，男男女，老老少，大大小，一個一個，三天三晩，要走盡，…若是三天三晩不走盡，本督親自來巡街，見一個湖南人殺一個，見二個殺一雙（湖南人は男も女も、老いも若きも、大人も子供も、一人殘らず、三日三晩のうちに盡く出て行かねばならない。…もし三日三晩で出て行かなければ、私が自ら街を巡邏し、一人の湖南人に出會えば一人を殺し、二人に會えば皆殺しにする）」とし、もし從わねば、南京の湖南會館を燒き拂うという旨の諭告を出す。これを知った彭大人は、皇帝に奏上して李大人を罷免、また「萬歲聖旨來傳令，永不準別省人，來到南京做總督，只準湖南人方可行，（天子さまからの命令が傳えられた、永久に他省の人間は、南京總督を務めてはならない、ただ湖南人にのみそれを許す）」という聖旨のもと、後任に湖南の劉東山を連れて來る。

特にこの故事は、太平天國後の南京を舞臺に、安徽の李大人と湖南の彭大人の對立を描くことから、姚逸之氏は、咸豐、同治年間の二大軍事勢力であった、李鴻章率いる安徽の淮軍と、曾國藩および彭玉麟率いる湖南の湘軍の對立が背景にあり、それが一連の「彭大人私訪」故事を生むきっかけになったのではないか、と指摘する。[16] 湘軍と淮軍の對立も然ることながら、要地であった南京を巡る爭いを湖南人が制するという内容には、湖南の勢力の强さを顯示する意味も含まれていたと考えられる。例えば、『私訪江南』⑨ の、陶大人が南京の城隍廟にて芝居を觀る場面では「列位那江南的戲臺就不比我的湖南湖北的戲臺（皆様、かの江南の舞臺は、我が湖南湖北の舞臺には及ばない）」と、南京と對比して湖南の優位がさりげなく述べられる。

その他、『私訪蘇州』では、蘇州の張大人の妾に入った湖南省常德府武林出身の王桂英の冤魂が、蘇州を訪れた彭大人の夢に現れ、正妻の楊氏と王一爺の私通現場を偶然目擊した爲、楊氏に謀殺されたと訴える。ある日、別の事件を追っていた彭大人は、謀られて獄に繫がれるが、これまた冤罪により獄中の門役に充てられた湖北出身の周玉英に逃がしてもらう。ひとまず別件を解決した後、王桂英の冤罪を晴らし、周玉英も救出した。また『私訪湖北漢陽』には、湖北漢陽で暮らす湖南省湘鄉出身の水煙賣りの常長子や、叔父に銀六十兩で娼妓として賣られてしまった湖南省嶽陽府華容の黄國中の娘、黄曰英など、様々な湖南人が登場する。

それ以外にも「私訪」先で冤罪と睨んだ事件がなかなか證明出來ず、却って獄に繫がれて皇帝から處罰されそうになる時、大人が土牢の中で故鄉や家族を思って嘆息するという場面が、陶大人、彭大人の故事に共通してある。それぞれ、陶大人は「…再不能回到湖南去，再不能轉到安化程（もう湖南に戻れないのか、もう安化に歸ることは出來ないのか）」（『新刻私訪江南』⑧）と、彭大人は「再不能回到湖南省，再不能回家去祖墓，再不能夫妻來相會，再不能父子來相逢（もう湖南省に歸れないのか、もう實家へ墓參りに戻ることも出來ず、夫婦の再會も果たせず、親子の對面も叶わないのか）」（『私訪蓮花廳全部』⑯）と述べる。特に彭玉麟は實生活において、毎年長江巡閲が終わると、湖南の衡州府城東洲に建てた妻の居る別院「退省庵」へ戻ったというので、[17] あながち事實と乖離したセリフではない。

「私訪」を通じて、他鄉において湖南人を助け、湖南を稱え、湖南を想う。これらはまさに湖南人の湖南人による湖南人のための故事として存在していたと言えるだろう。

(3) 實際の私訪

また、各大人による「私訪」行爲は、故事だけでなく實際に行われていたものでもあった。

まず、陶澍であるが、彼の上奏文には、當時各地に横行した匪徒に對する密偵や拿捕を强行し、嚴しく取り締まったという報告が散見する。例えば「…隨卽會同副將李恩元帶領辨兵改裝易服，水陸潛進。于四月二十八日四更時分，乘梟匪睡熟，出其不意，四面圍住。千總鄭長清首先跳上匪船，打破艙門。（すぐに副將の李恩元と共に下士官と兵卒を率いて變裝し、水路、陸路を密かに進んだ。四月二十八日丑の刻に、私鹽密賣の惡徒等が熟睡している隙に乘じて、不意を突き、四方を包圍した。千總（少尉）の鄭長清が先ず匪船に乘り込み、船室の扉を打ち破った。[18]）」などがある。故事中にも陶大人が「江洋大盜」による被害を調査しなければならないと語る場面や、舟で移動中に賊の襲撃を受けた人々の話などがしばしば取り上げられる樣に、匪徒などによる被害は、當時の大きな社會問題でもあった。そして、その調査の手段として「改裝易服」が採用されていたのである。

また、彭玉麟の奏稿にも、「均改裝易服，不動聲色，沿途密訪（均しく變裝をし、氣付かれぬ樣子で、行路沿いに民情調査をした。[19]）」や、光緒四年（一八七九）の奏稿では、湖北武昌、黃岡兩縣所屬の樊口にかかる堤防に關する訴訟の實態を把握するべく「…拜折後卽改裝易服，搭坐民船星夜上駛（皇帝への上奏が終わるとすぐに變裝をし、民間の船に乘り込み晝夜兼行で走らせた。[20]）」という記述がある。また同年、彭玉麟は郭嵩燾（一八一八－一八九一）の弟である郭崑燾（一八二三－一八八二）に、この樊口の事について、書信の中で次のように述べる。

「復郭崑燾」光緒四年九月二十三日

…以樊口內梁子等湖屬七州縣，非改裝易服親勘其處，不得詳細情形。因隨擧外委一辨，親兵一名，半肩行李，星夜附輪舟上駛，匿迹至黃州，易民劃入樊口，作爲地師，水陸兼行，遍歷濱湖七州縣，明勘暗訪，獲免地方官紳迎送之苦，而盡得實在情形。[21]

…樊口（湖北省鄂州市）內の梁子湖などの湖は、七つの州と縣に屬しているから、變裝して自ら調査を行わなければ、詳しい狀況が分からない。そこで外委（臨時派遣の武官）を一名、護衛兵を一名選び、最低限の荷物で、日に夜を繼いで船を走らせ、密かに黃州（湖北省東部）に到ると、庶民に扮して樊口に漕ぎ入れ、風水師となって、水路、陸路を進み、湖に臨む七つの州と縣を遍く巡り、隈なく密かに實地調査をしたので、地方官吏や名士による送迎の煩わしさを免れることができ、また實際の狀況も盡く把握することが出來た。

「作爲地師」つまり風水師に身を寳せば、水路も陸路も兩方自由に行くことが出來ると述べる箇所からは、變裝への工夫も窺える。

清代、このような地方官による「私訪」は、きわめてありふれた手段となっており、[22]その行爲は、車王府鼓詞の公案物や公案小說の物語中にも必ず盛り込まれたが、例えば『彭公案』の彭鵬や『施公案』の施世綸らが實際に私訪を行っていたかどうかは不詳である。しかし、湖南における「私訪」故事の主人公たちが、實際に頻繁に「私訪」を行い、故事と同じく匪賊を捕え、民間調査をしていたという事實は注目に値する。

(4) 包公の「私訪」劇の影響

また、當時湖南地域で流行した地方戯との影響關係を窺わせる場面が、故事中に存在する。

三個戯臺演戯文，…東邊唱的全家福，西邊唱的文武陞，普慶班唱高腔，唱的宋室清官訪東京，陶大人西邊却不看，單看普慶訪東京，前朝清官把東京訪，我朝清官訪南京，大人越看越有情…（『陶大人私訪江南』⑨）

三つの舞臺で芝居がかかり、…東側で歌うは『全家福』[23]、西側で歌うは『文武陞』[24]、普慶班[25]が高腔で、歌うは宋代清官の『訪東京』、陶大人は西側を觀ずに、ただ普慶班の『訪東京』を觀るばかり、先の清官は東京を私訪し、本朝の清官は南京を私訪する、陶大人、觀れば觀るほど面白く…

大人他走城隍廟，就在廟門把脚停，圭□（眼）擡頭來觀看，□（要）到廟內看分明，廟內戯文多熱鬧，小買小賣多少人，慢來停脚看戯文，頭句唱的全家福，二句唱的殺四門，三句唱的訪東京，前朝且把東京訪，我今卽訪汗陽城…（『私訪湖北漢陽』㉖。□は磨滅して判讀不能な文字。（　）は筆者による。）

彭大人は城隍廟までやって來ると、廟の門前で足を止め、頭をもたげて眺めやる、廟內に入れば一目瞭然、廟內は芝居の上演で大賑わい、商賣人も大勢行き交う、ゆっくり立ち止まって芝居に見入れば、初めの句は『全家福』、二句目が『殺四門』[26]で、三句目は『訪東京』、先の時代は東京を私訪、私は今漢陽城を私訪する…

それぞれ陶大人が南京で、彭大人が湖北漢陽の城隍廟で芝居を觀た時の様子である。宋の清官包拯が東京を私訪する『訪東京』の芝居は、彼らの現狀と重なり特に目を引いた。この『訪東京』とは高腔の演目で、一名『水牢記』ともいい、明の鄭汝耿の南戯傳奇『陳可中剔目記』[27]に取材する。『訪東京』の內容は以下の通り。北宋東京の惡黨曹大本が、秀才陳可忠の妻韓氏を手に入れるために陳氏を謀殺しようとするが失敗、潮陽の兵營への流刑に陷れることには成功する。ある日、包公は私行中にこの噂を聞き付け實情を調べようと曹氏を付けるが、誤って見つかり、水牢に閉じ込められてしまう。何とか逃げ出し、今度は正式に曹氏を捕らえて處刑した、という包公による「私訪」劇である。[28]主に、湖南地域を中心に湘劇、祁劇、辰河戯、衡陽湘劇の高腔で演じられたというから、[29]このような湖南における演劇での「私訪」劇の流行は、恐らく一連の湖南「私訪」故事說唱の創作および出現に、少なからず影響を與えたのではないかと思しい。

三、「私訪」故事說唱の流通

(1)「私訪」故事說唱の出版時期

次に、出版の方面から湖南における「私訪」故事說唱の流通について考察したい。まず、湖南における說唱本の出版は、早くて同治年間あたりから始まるとされる。その頃には寶慶府皇恩寺（邵陽市西區長新街）に通俗唱本の專賣店が出現し、數十の書店が軒を連ね、[30]中でも現存する版本が多い湘潭の黃三元堂は、光緒年間に開業したと言われる。[31]現在、全國各地に所藏される湖南說唱本のうち、刊行年が分かるもので一番古い版本は、光緒三年（一八七七）の『南橋會』（寧鄕・

錦芳堂刻本[32]）であるから、同治から光緒年間にかけ、湖南において説唱本の出版活動は成長し、隆盛期を迎えたと考えられる。このような藝能やそれにまつわる出版物が、廣く流通するようになる背景として、湘軍のお膝元であった湖南が、同治三年（一八六四）の太平天國の亂終結後の恩惠などで、非常に繁榮したこと等が擧げられる[33]。

そのうち「私訪」故事は、表に擧げた各版本の刊記から判斷すると、遲くても光緒三十二年（一九〇六）には出版されていたと考えられる。また、本文に書かれる彭大人の官職名からも、おおよその年代を考察することが出來る。光緒三十二年に文元堂から出た『私訪江南』では、「太子太保」が下賜され、また、『彭大人私訪廣東』のうち、㉑は「又賜太子與太保」とするが、⑰には具體的な言及はない。その他、「你看清官彭公保」（⑯）や、「你看清官彭公保」（⑪）などのように、「公保」と記すものもある。「公保（宮保）」とは、太子少保のことも太子太保のことも指す。實世界において彭大人は、同治三年に、太平天國の功績から「太子少保銜」を賜り、逝去した光緒十六年に長江水師による功績から「太子太保」を贈られたので、やはり、その出版時期は同治から光緒年間にかけてということになるだろう。

(2) 彭大人「私訪」故事の流通

湖南「私訪」故事の説唱本が流通を續ける過程で、彭大人の「私訪」故事の中身にある興味深い現象が起こる。時代は下り、民國十五年に文順慶記から出版された『私訪蓮花廳』の冒頭の一節をみてみたい。

…出京走的保定府，江蘇江寧又來臨，南京貶了李撫院，救了幾多百姓們，廣東毀了萬花樓，殺了三洪與范雲，山東山西都訪過，湖北湖南漢陽城，一十八省難表盡

…（彭大人は）北京を出發して保定府へ向かい、江蘇の江寧にもお越しになった、南京では李撫院を罷免して、數多の民衆を救出し、廣東では萬花樓を燒き拂い、馬三洪と范雲を處刑した、山東、山西も私訪濟み、湖北、湖南、漢陽城、十八省全ては言い盡くせない

それぞれ、湖南人を迫害した南京總督の李巡撫を罷免した『私訪江南』の話、廣東の大盜賊、馬三洪、范雲らが所有する萬花樓を燒き拂って彼らを捕えた『私訪廣東』の話など、彭大人が各地で解決した事件や、私訪した地名など、かつて單獨で出版されていた「彭大人」シリーズとも言える故事がまとめて列擧される。これは、現在確認することが出來るその他の各種版本には見られない文句なので、民國十五年に文順慶記から出版される際、新たに付加された一節だったと考えられる。

このように、彭大人の話は清末から民國初期にかけての長い期間に亙って歡迎され續け、民衆の間で多くの故事や傳説を生んだ。例えば、清・徐珂（一八六九-一九二八）『清稗類鈔』所收の「彭剛直崇儉」、「彭剛直殺李文忠猶子」、「彭剛直斬管帶」等や、李少陵「彭宮保與梅花戀史　湘軍掌故叢談（六）[34]」、清・柴萼『梵天廬叢錄』「彭剛直公二十二則[35]」、『中國民間故事集成・湖南卷』所收の話[36]などは、長沙、江南、鎭江、九江、合肥、蘇州、福建、廣東を「私訪」し、腐敗官僚、民事事件に對する嚴しい裁きを行ったことを傳える。そのため、人々から「青天大老爺（清廉公正なお役人[37]）」などとも呼ばれた彭玉麟は、湖南人の誇りであり、まさに當時の包青天（包公）のような存

在だったと言えるだろう。

(3)「私訪」故事説唱本の受容と他地域への流通

では、シリーズ物として書肆に意識されるほど、讀み物として廣く浸透した、彭大人を始めとする一連の「私訪」故事は、具體的にどのような人々に享受され、流通したのだろうか。

湖南省湘潭出身の作家羅皚嵐（一九〇六‐一九八三）の年譜には「一九〇七年‐一九一一年……此後，能獨自朗讀『山伯訪友』，『彭大人私訪』等通俗木刻唱本」[38]とあり、羅氏が幼い頃に梁山伯祝英臺故事の一節である『山伯訪友』や、『彭大人私訪』などを一人で朗讀することが出來たと述べる。いずれも現存するこれらの説唱本は、當時湖南の人々の間に廣く普及し、更には一定の知識階級にある幼い子供によっても享受されていたことが分かる。

また、湖南省長沙の人、李少陵（一八九八‐一九七〇）による以下の記事も興味深い。李氏は後に臺灣へ渡り、彭玉麟に關する記事を雜誌等で多數發表している[39]。

> 在清代末年，長江流域各省，流行着两種小傳書：一是陶澍私訪江南；一是彭宮保私訪江南。這两部小册子，在民國初年，我們還可以見到，可是到了今日，這两部小册子，似已絶跡了[40]。

清代末年、長江流域の各省に、二種類の小傳書が流行した。一つは『陶澍私訪江南』、一つは『彭宮保私訪江南』。この二部の小册子は、民國初年には、まだ見かけたが、今日では全く見なくなってしまった。

ここで言う小傳書や小册子がどのような形態のものだったのか今日では定かでないが、書名や、それぞれの出版形態、流行の時期などから、恐らく湖南説唱本を指すのではないかと思しい。また、それらが湖南省内のみだけでなく、長江流域にも流通していたという事實は、説唱本の流通を考える上で重要である。ちょうど説唱本の出版が盛んであった時期と、實世界における彭玉麟の長江巡閲が重なり合うため、おそらく彼らの「私訪」行爲は、説唱文藝の格好の題材となり、また湖南の最も親しみのある噂やニュースとして、廣く流布したと思われる。その情報の擴散に、説唱本は一役を擔っていたと言えるだろう。現存する湖南の「私訪」故事説唱の中でも、彭玉麟にまつわる「私訪」故事が、版本、故事の種類、出版數共に拔ん出て多いのも、その爲だと考えられる。

一方で、②～⑤の『吳大人私訪九人頭』は、このような出版、流通と異なる動きをみせるのである。第一章の表からも分かる通り、長沙の左三元堂や星沙刻本の他、この話に限っては、上海の椿蔭書莊、協成書局の石印本がある。

石印出版活動は、光緒後期より民國期にかけて上海で隆盛する。それに伴い、嘉慶期以降江南で流行した代言體彈詞や、清末の北方で盛んだった鼓詞の出版も、次第に上海へと移り、石印本として大量に飜印され、新たな流通の場を獲得した[41]。湖南説唱本の出版は、同治以降、特に光緒、民國初期にかけて盛り上がりを見せたため、北方や江南の説唱文藝とは活動時期をやや後にするが、やはり連動するように、徐々に上海の石印本へと集約されていく。しかし、管見の限り、湖南説唱本のうち石印出版される殆ど全ては、その内容が湖南と關わりの無い物語であると言って良い[42]。右に擧げた『吳大人私訪九人頭』

もその例に漏れない。『吳大人私訪九人頭』は、湖南「私訪」故事のうち、①、⑥～㉗の冒頭に共通してみられる、皇帝から「上皇劍」や「先斬後奏」の權利を授かり、各地を「私訪」するという古典的な設定も無く、物語は、漢陽で發生した人頭案（首切り事件）が連鎖的に引き起こす悲惨な殺人事件を中心に構成され、前半最後に吳大人が登場し、藥賣りに扮して出かけるところで終わり、後半は事件解決の様子が紙幅を割いて丹念に描かれる。この創作の背景には、斬首を巡る奇案を描く湖北の楚劇『九人頭』があり、蒲劇や潮州劇など各地方戲で廣く上演され、人口に膾炙した演目であった。[43] 恐らくその人氣のプロットが、湖南で流行していた「私訪」故事と融合して『吳大人私訪九人頭』と成り、讀み物として新たな地位を確立し、湖南地域以外でも廣く受容を得る事が出來るようになったのではないかと考えられる。[44]

一方、實際の上演としては、長沙彈詞の「馬金龍訪華容」、「陶澍訪城隍廟」、「陶澍訪華容」、「陶澍訪榔梨市」、「彭大人訪廣東」[45]や、漁鼓の「陶澍訪南京」、「彭大人訪廣東」、「彭玉麟訪九龍山」、「彭玉麟訪華容」[46]、湖北の東山番梆鼓の「彭大人私訪漢陽」[47]などの演目が殘り、また陶澍の「私訪」故事は花鼓戲で現在も演じられているが、恐らく方言などの障害もあり、その流布は非常に限定された地域に留まるのみとなったのであろう。

おわりに

かつて顧頡剛、吳立模兩氏は、說唱本に描かれるのは「民衆生活に最も親しみのあるありのままの姿だ」と、また「傳播について言えば、…唱本は狹い範圍で流行するものもあれば、廣い範圍で流行するものもある」と指摘したことがある。[48]

清末民初の湖南の說唱文藝活動において、湖南の著名人物を英雄に仕立てる形式として「私訪」が選ばれ、吳大人、陶大人、彭大人などの「私訪」故事說唱作品羣が出現したが、これらの流通は、まさに顧氏等の言うところの、狹い範圍のものであった。各大人が民情調査で解決する事件は虛構であり、また、故事の內容、表現には、傳統的な公案劇の「私訪」を踏襲する部分が見られ、典型的或いは古典的である。

しかし、そこに反映される文化、社會は、實際と重なるものが多い。特に、太平天國の亂で活躍し、その後長江水師として湖南を據點に各省を巡閱した彭玉麟にまつわる「私訪」故事は、湖南における說唱文藝活動の隆盛する時期とも重なり合い、爆發的に廣がった。彭玉麟が頻繁に變裝微行で各地を巡察し、貪官汚吏への嚴格な裁きを行った事實や、「私訪」と連動して起こる事件は、說唱文藝活動に吸收され、大量に出版或いは演じられながら、限定的な時間と地域において廣く流通したのである。

その一方で、全國的な營利の絡む、光緒後期以降の都市上海における出版文化の形成、成熟に伴い、木版印刷が石印に取って代わられる樣になると、飜印される多くは、湖南と關わりの無い故事が中心となる。つまり地域性の强い「私訪」故事は、演劇としては限定的に存續し續けるが、讀み物としては次第に淘汰を經ていくのである。『吳大人私訪九人頭』に代表されるように、「私訪」のテーマを繼承した創作をしながらも、湖南の地域性を取り拂うことによって、湖南說唱文藝は新たな活動の場を切り開いていくのである。

清末民初の說唱文藝活動の展開において、太平天國の亂はひとつの

契機をもたらし、また湖南という地は、その文化モデルをみるうえでも非常に重要な地域として存在していたと言えるだろう。以上、湖南における「私訪」故事説唱作品羣に對する檢討を通し、民間に埋沒していた清末民初の説唱文藝の様相が、少なからず明らかになったのではないだろうか。

注

（1）姚逸之・鍾貢勛述『湖南唱本提要』（國立中山大學語言歷史研究所、一九二九年三月）。張繼光「一百五十種湖南唱本書錄」『中國文哲研究通訊』第八卷・第二輯（一九九八年六月）一一一・一四二頁。

（2）筆者は以前、明傳奇「商輅三元記」に取材する秦雪梅故事の流通と湖南説唱本との關係について考察したことがある。岩田和子「秦雪梅故事唱本流通考―湖南における唱本の流通―」『早稲田大學大學院文學研究科紀要』第五五輯（二〇一〇年二月）一〇三・一一四頁。

（3）金海南『水戸黄門「漫遊」考』（東京・新人物往來社、一九九九年）に詳しい考察がある。

（4）表に擧げる所藏箇所の略稱は以下の通り。「早大演博」早稲田大學演劇博物館、「早大中央」早稲田大學中央圖書館特別資料閲覧室、「國圖」國家圖書館、「首都圖」首都圖書館、「復旦」復旦大學古籍閲覧室、「上圖」上海圖書館、「湖南圖」湖南圖書館、「傅斯年」臺灣中央研究院傅斯年圖書館、「大木」大木康氏。また、本文中の表記もこれに從う。なお、□□は磨滅もしくは削られていて判讀不能な箇所を表す。

（5）但し現物は損壞しているため閲覧出來なかった。刊記は圖書館目錄に從う。

（6）注（1）『湖南唱本提要』一一〇頁に記載がある。

（7）筆者が行った説唱本の目錄に對する調査に據ると、書名（ここでは卷首題を採る）や封面題或いは表題に「私訪」という言葉を採るものは、本文に擧げる故事以外にも、例えば『新刻小清官烏江渡私訪全部』（封面題『七美圖全部』、表題「喩文榜私訪江南」、中湘刻本・湖南圖等所藏）や、『新刻烏金記』（封面題『烏金記全部』、表題「張大人私訪捉拿雷龍　陳氏女救夫伸冤報仇」、中湘・黄三元堂刻本、上圖等所藏）があり、これらは後に石印本『新抄小清官私訪烏江渡全本』（椿蔭書莊、傅斯年所藏）、『繪圖王小姐烏金記全集』（上海姚文海書局他・上圖所藏）として出版される。その他、出版地などの明記が無いものとして、『劉大人私訪』（泰山堂刻本、國圖所藏）や、『新刻魏大人私訪海州記』（清刻本、國圖所藏）、『新刻劉都堂私訪大清傳』（懷德堂刻本、國圖所藏）があり、これらも後に石印本『繪圖魏大人私訪海州記全本』（椿蔭書莊、傅斯年所藏）や『改良劉貴成寫退婚私訪釧金鐲記全本』（槐蔭山房、復旦所藏。協成書局、劉德記書局、傅斯年所藏）が出版される。また『新刻殺子報私訪天齊廟大剛許氏全本』（別墅山房刻本、傅斯年・國圖所藏。石印本、傅斯年所藏）等があるが、やはり壓倒的多數を占めるのは湖南説唱本である。その他、例えば潮州歌には皇帝の漫遊記として題名に「私訪」ではなく「游」を採る『新造乾隆君游山東』、『乾隆君游蘇州』などが幾つか存在する。このような他地域説唱文藝や公案物の小説、藝能等との比較や影響關係については別途考察したい。

（8）前掲注（1）張光繼「一百五十種湖南唱本書錄」では、湖南唱本を「説唱、戲曲、山歌、小調、其他」に大きく分類し、「説唱類」に關しては、曲詞の形式、構成から、更に「甲、乙、丙、丁…」の十類に分け、それぞれの形式と語句の特徴に關する説明を付す。

(9) 頭四句或八句亦似七言詩，但此詩句形式多不明顯。其後韻、散夾雜，韻語皆七字句，隔句押韻，一韻到底，所押多爲平聲韻。韻文前段也常以「…不講…單講…」或「…不唱…單表…」等用語帶入正文。…首段散文道白常以「說話…」「卻說…」…等用語起頭。

(10) 全篇七字句，第一、二、四句押韻，但此詩句形式多不明顯。其後接七字韻語，隔句用韻，一韻到底，所押多爲平聲韻。前段用語常有「…不講…單講…」。

(11) これらは長沙彈詞、漁鼓の說唱形式とおおよそ似る。長沙彈詞と漁鼓の形式については『中國曲藝志・湖南卷』(新華出版社、新華書店經銷、一九九二年) に詳しい。「漁鼓的詞格多爲七字句與十字句。…均按方言平仄規律，合轍壓韻。」(三九四頁)、「彈詞的底本爲散文、韻文相間，通俗易懂，講究口語化。演唱時說唱結合，唱爲韻文，說爲散文，個別的說白亦有韻文（韻白）。…唱詞多爲七字句，也有十字句或長短不一的句子，也有垛句、數唱和嵌句、排比句式。…唱詞的韻轍採用全國通用的十三道大轍…唱詞講究平仄分明。一般是一韻到底，中間不換韻。如需換韻，必須在一段道白後或較長的音樂過門之後，換得自然流暢。」(六一三頁)

(12) 例として『私訪蓮花廳全部』(⑯) の一節を以下に擧げる。その他の故事もほぼ同じ內容である。「彭大人他有功，萬歲到他官不小，金鑾殿上開金口，寡人封你大三級，賜你一口上皇劍，又賜三千人和馬，一十八省把兵巡」

(13) 『清史稿』卷三百九、列傳九十六「吳達善」參照。

(14) 『清史稿』卷三百七十九、列傳一百六十六「陶澍」參照。

(15) 『清史稿』卷四百十、列傳一百九十七「彭玉麟」參照。

(16) 前揭注 (1)『湖南唱本提要』一一六・一一七頁。「註語——這本書中的事實，很值得注意，而這事在正史上也不能察得，不知眞假？書中的李大人，無名而其籍貫又係安徽，這自然是李鴻章了。當時軍人有皖湘二系，都有很大的勢力；因爲權力意見的不合，難免不有衝突。一般人又喜用意氣，結果使皖湘兩省的人民，互相仇視，這事在咸同年間，一定是有的，所以彭大人私訪一書產生。書中事實，自然不確，然當時皖湘二系軍人之不相容，是斷無疑意的了。」

(17) 彭玉麟著『彭玉麟集・下册』(梁紹輝等整理、長沙：嶽麓書社、二〇〇三年) 所收「附錄：彭玉麟年表」參照。

(18) 陶樹著『陶澍集』【奏疏 緝捕】「拿獲老虎涇梟匪多名飭審附片」(長沙：嶽麓書社、一九九八年、四〇三・四〇四頁)

(19) 前揭注 (17) 同書上册、二九七・三〇〇頁。【奏稿】光緒七年「遵查武員參款折」六月初五日「…當將卽赴江西省竝往贛南密訪各緣由，于五月初二日恭折具奏在案。臣金陵閱操事竣，卽于初四日輕舟星夜上駛，于十二日過江西省河，于二十四日行抵贛州，復于六月初三日歸至江西省城，均改裝易服，不動聲色，沿途密訪，始行印證明確，謹分別据實爲我皇太后、皇上陳之。」

(20) 前揭注 (17) 同書下册、二六七・二七二頁。【奏稿】光緒四年「遵查樊口情形折」九月十九日「…臣玉麟于八月初十日在瓜洲巡閱差次，先奉八月初一日寄諭，當卽奏報起程日期，竝聲明先行密查等因。拜折後卽改裝易服，搭坐民船星夜上駛，于八月二十三日行抵湖北武昌，黃岡兩縣所屬之樊口。雇小劃入樊口三里餘，卽筑堤、毀堤興訟之處。該堤雖毀，形迹猶存，橫寬不過數十丈，直寬不十丈。」

(21) 前揭注 (17) 同書中册、四七四・四七五頁。

(22) 前揭注 (3) の金氏著書三六・六〇頁に、林則徐の私行に關する記述がある。

(23) 同名の劇は複數あるが、主に京劇、秦腔、山東曹州梆子、山西蒲州梆

子、北路、晉中梆子と、北方を中心に演じられる（『中國劇目辭典』、王森然遺稿『中國劇目辭典』擴編委員會擴編、河北教育出版社、一九九七年、二五八頁參照）。また湖南では湘劇、祁劇、衡陽湘劇、武陵戲、荊河戲、巴陵で演じられる（「湖南地方大戲劇種傳統劇目表」『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戲誌』湖南省戲曲研究所編、李恕基責任編輯、一九九二年。六二五頁參照）。

(24) 祁劇、衡陽湘劇、辰河戲、湘劇、武陵戲、荊河戲、巴陵戲に演目があり、湖南一帶で演じられる（前掲注（23）後出同書、六五一頁參照）。

(25) 湘劇昆腔班のこと。清・乾隆初年に北京から長沙に來た戲班と傳えられる。長沙の口語音で昆曲をうたう戲班となるが、光緒十年以降昆曲の衰退に伴い解體した（『中國戲曲志・湖南卷』中國戲曲志編輯委員會、文化藝術出版社出版、一九九〇年、四一四頁參照）。

(26) 秦懷玉を主人公とする「殺四門」と、劉金定とする「女殺四門」の話がある。前者は京劇、徽劇、漢劇、同州梆子、後者は京劇、秦腔、豫劇、河北梆子、山西上黨梆子などに演目がある（前掲注（23）前出同書、五二、六三二頁參照）。また湖南では、前者が湘劇、武陵戲、荊河戲、巴陵戲、後者が湘劇、祁劇、衡陽湘劇、武陵戲、荊河戲、巴陵戲で演じられる（前掲注（23）後出同書、六一五、六三四頁參照）。

(27) 徐渭（一五二一－一五九三）『南詞敍錄』「本朝」に著錄がある。已佚。鄭汝耿の事跡については不詳。

(28) 前掲注（25）同書、一二七頁參照。また、『訪東京』に關する考察に、朱萬曙「《認金梳》、《剔目記》與明代包公戲」『戲曲藝術』一期（一九九九年）六六・七一頁などがある。

(29) 前掲注（23）後出同書、六三九頁。

(30) 前掲注（11）同書二六頁の「大事年表」に「…同治年間（一八六二－一八七四）寶慶府皇恩寺（今邵陽市西區長新街）形成專賣『十月飄』、『雙探妹』、『三姑記』、『三元記』、『孟姜女』等調子書和『五美圖』、『彭玉麟私訪廣東』等通俗唱本的一條街，有書鋪數十家。」と記述がある。

(31) 『湘潭縣志』卷三十三（湘潭縣地方志編纂委員會編、長沙：湖南出版社、一九九五年）七七七頁に「清末，縣城有黃三元堂、楊大文堂、翰墨、大經四家私營書店。黃三元堂，光緒年間開業，銷售木刻唱本等近百種。」とある。

(32) 前掲注（1）論文「一百五十種湖南唱本書錄」に著錄がある。また首都圖書館にも所藏が確認される。

(33) 前掲注（11）同書、八頁の「總述 明清以來的湖南曲藝」參照。

(34) 『彭玉麟傳記資料』（臺北：天一出版社）所收『藝文誌』第23期。

(35) 前掲注（34）同書所收。

(36) 北京：中國ISBN中心出版、二〇〇二年。「打開南京府發洋財」（一四一頁）、「彭玉麟游山審案」（一四七－一四八頁）などを收錄する。

(37) 前掲注（34）『彭玉麟傳記資料』所收の『歷史人物故事』（臺北正中書局、一九七三年）に記載される李少陵「七十八、彭玉麟故事」「八、彭宮保私訪江南」による。

(38) 叶雪芬「羅皚嵐年譜」『邵陽師範高等專科學校學報』（一九九九年）

(39) 李少陵に關する記事は、『中央日報』副刊（一九六三年一二月一六日）掲載の毛一波「彭玉麟簡介」に詳しい（前掲注（34）同書所收）。

(40) 前掲注（37）に同じ。

(41) 說唱本の出版地の移行について言及する論考に、李豫・李雪梅・孫英芳・李巍『中國鼓詞總目』（山西古籍出版社、二〇〇六年）、田中譜美「清代江南における代言體彈詞の出版について：「彈詞總目錄」を基礎資料とした量的研究」『金澤大學中國語學中國文學教室紀要』一〇（二〇

〇七年一二月）一三-三〇頁、李豫・尙麗新・李雪梅・莫麗燕『清代木刻鼓詞小說考略』（山西：三晉出版社、二〇〇九年）がある。

（42）注（7）で擧げた故事は、全て湖南と關わりのない內容であり、また上海で石印本となって出版される。

（43）『九人頭』と『獄卒平冤』については、以下の考察がある。郭啓宏「戲曲古代劇的文學性轉變—評楚劇《獄卒平冤》」『劇本』一二期（一九八五年）二一、七二頁、武縱「脫胎換骨　移花接木—從《九人頭》到《獄卒平冤》」『戲曲藝術』二期（一九八六年）一二-一四頁。

（44）現存數が多い②の星沙刻本は、全四卷、各卷十四～十五葉から成る。「封面」の表記から分かるように、三、四卷をまとめて「下卷」或いは「後本」と呼ぶ。吳大人による事件解決が主軸となる下卷は、「私訪」よりも「公案」の要素が强いためか、封面で「吳公案」と題される。また、湖南說唱本のうち、類似の人頭案を描く故事に『新刻茶碗記六人頭』（封面「私訪六人頭／新刻茶碗記／六十册／星沙小西門外　正華堂發客」、國圖所藏）もあり、湖南における人頭案と私訪故事流行の片鱗がうかがえる。これも後に槐蔭山房から『張秀英茶碗記全本』として石印出版される（復旦所藏）。

（45）前掲注（11）同書所收「新編歷史題材曲目（書目）表」二〇七頁參照。

（46）前掲注（11）同書所收「漁鼓彈詞類・漁鼓」三九三、三九六、四〇八、四一五、四四二、五二四-五三六頁參照。

（47）『中國曲藝志・湖北卷』「傳統曲（書）目表」（中國ISBN中心：新華書店北京發行所經銷、二〇〇〇年）二三〇頁參照。

（48）顧頡剛、吳立模「蘇州唱本敍錄」、（顧頡剛等輯、王煦華整理『吳歌小史』所收、南京：江蘇古籍出版社、一九九九年）。原文は以下の通り。

「就意義上說，歌謠是民衆抒寫的心聲：唱本也是民衆抒寫的心聲。就流傳上說，歌謠有流行得很廣的，很狹的：唱本也有流行得很廣的，很狹的」

本稿は平成二十二—二十三年度文部科學省科學研究費・研究活動スタート支援「清末民國初期における湖南說唱本の研究」（課題番號22820072）の成果の一部である。